

イスラームの基本的教え

小田淑子

ご紹介にあずかりました小田でございます。できるだけ基本的な教えについて話して下さいとの要望を受けておりますので、イスラームの基本的な教えを丁寧に説明していきたいと思います。

一 日本人の宗教観とイスラーム

まず、「日本人の宗教観とイスラーム」から始めます。私自身は日本人で、日本的な仏教徒です。日本では、イスラームはテロやイラク問題など、何かと物騒なことばかりがニュースになるわけです。「イスラーム」と

いう言葉がテレビや報道、新聞に載るときは、たいがいテロや戦争絡みのため、条件反射のように、紛争とイスラームが連想されがちです。イスラームに好意的な印象をもつ日本人は恐らく少なく、「何か分かりにくい宗教」、「恐い宗教」という印象が強いと思います。それはマスコミの報道によるところが大きいのです。

イスラームの信仰者は十億人から十二億人程度であり、世界人口の五分の一がイスラーム教徒です。その人たちすべてが紛争や戦争を肯定しているかといえれば、そうではない。平和に何気ない日常を暮らしているわ

けです。歴史を考えてもそうです。紛争があつた時期はむろんありますが、長い歴史を見ると、意外と平和に共存してきた宗教です。

その辺の知識が、日本で一般の報道に載ることが余りにも少ない。だから、イスラームにも穏やかな日常があり、何でもない人間同士の争いがあり、日本の社会と変わらない面が多いにもかかわらず、報道による印象から「イスラーム」イコール「危ない宗教」となりがちです。

私自身、長年、宗教学を学生に教えている中で、日本人にとってイスラーム理解への入り口の難しさ、敷居の高さ、取っつきにくい理由に、日本人の「一神教嫌い」と「戒律嫌い」があると考えています。これは日本人の全般に関する私の印象でして、間違っているのであれば、ご批判をいただけたらと思います。

明治以後の日本人にとって、キリスト教は憧れの西洋文化と結びついていたと思います。しかし、ミッシェンスクールがたくさんできて、人気もある。最近では多くの人がキリスト教の教会で結婚式を挙げるけれ

ど、キリスト教徒の数は増えていません。司馬遼太郎が上手に言っています。「キリスト教は元を取っていない」と。要するに、キリスト教が学校を創るには、莫大な寄付金などを使い、布教目的なのですが、生徒や学生はクリスチャンに改宗しない。多分、日本人にとって大事なのが先祖様であり、いろいろな神や仏を崇拝している。ですから、日本人は「唯一神以外を崇拝してはいけない」と言うキリスト教を嫌うのではないかというのが私の実感です。

もう一つ、戒律嫌いもあります。日本の仏教では、一部の僧侶が比叡山や永平寺で厳しい修行をしています。が、大半の在家の仏教徒にはさほど厳しい戒律を課してこなかった。神道でも同様で、厳しい修行はほとんどない。せいぜい、葬式の際の精進料理程度ですが、最近はその精進料理さえいい加減になって、お膳に刺身がついていることも多いですね。

長い過去の生活で宗教的戒律に触れていない日本人にとっては、一日五度の礼拝と聞くだけでゾツとしてしまう。一方イスラームの人たちは物心がついたとき

に、戒律のある社会で育ちますから、礼拝や断食をするのが当然だと受けとめているので、日本人が感じるほど戒律を守ることへの嫌悪感はないはずです。

不思議なことです。日本人には出家者が少ない割りに、出家のイメージが強く、宗教というと、俗世間を離れていると考えがちです。実際は、宗教にはそうではない面がたくさんあるにもかかわらず、「宗教は？」と聞かれると、何か俗を離れた世界という印象が強く、在家信者や神道の氏子であっても「無宗教」と答えがちです。もう一つ、これも仏教の影響でしょうが、宗教を病や死と結び付けて考える人が非常に多い。宗教に入る人は、病や不幸にあった人で、自分はそうではないから宗教は必要ないと言います。ところが、イスラームは全く違います。イスラームで死や病といえ、あつげらんしたものです。「神が定めたもの」と、非常に淡泊です。最初に結論を言っておきますと、イスラームにとって宗教的に生きる場は健康な日常の社会生活です。健康な人が普通に子供を育てる場が、宗教の場なのです。病や死ということをきっかけに宗教的

になるということは、イスラームにはないのです。この点も大きな違いです。

二 イスラームの成立と拡大

初めにイスラームの成立と歴史を少しお話しておきます。ユダヤ教が最初の一神教、ユダヤ教から分かれたのがキリスト教で、三番目に成立した一神教がイスラームです。三つの世界宗教の一つで、世界宗教とは民族を越えて広がっている宗教です。それは、生まれによって宗教が決定されるのではなく、個人で改宗することができる宗教という意味です。ただし、どの世界宗教でも定着した後は、イスラーム教徒の子供は、生まれながらにイスラーム教徒になります。ただ、いつでも誰でもイスラーム教徒になることはできません。仏教もキリスト教もそうです。ところが、ヒンドゥー教やユダヤ教など民族宗教は生まれによって決まります。生まれた時点でその宗教に組み入れられる。逆に民族宗教に改宗したくても、難しい場合が多く、世界宗教とこの点が違う。世界宗教は誰でもいつでも改宗

できるからこそ、民族を越えて広がったのです。

イスラーム以前のアラブ人たちについて話します。今のサウジアラビアにメッカとメディナ（正確にはマッカとマディーナ）という都市があります。「踊りのメッカ」だとか、「何とかのメッカ」というメッカで、イスラームの聖地であり、イスラームが始まった場所です。イスラーム以前のアラビア半島に住んでいたアラブ人の社会をイスラームでは、ジャーヒリヤと呼びます。ジャーヒリヤは無知や無道の時代という意味で、イスラームから見ると当時のアラブ社会を侮辱した表現です。イスラームが始まる以前は、まだ啓示の知識のない野蛮な時代だったというわけです。ただし、まったく野蛮だったわけではなくて、アラブ人たちは部族社会を形成していて、そこには部族社会なりの宗教と秩序がありました。ジャーヒリヤの宗教は簡単に言えば祖先崇拜と氏神崇拜です。

日本すなわちのような農耕社会では、土地を守ってくれる産土神うぶが大事です。だけど、アラブ人たちは遊牧民にせよ、隊商、キャラバンの商人にせよ、移動します。移

動する場合、土地を守ってもらっても意味がなく、部族の人々を守る神が大事です。それぞれの部族に守護神がいて、自分たちの部族の守護神を拝み、自分たちの祖先を崇拜していた。ちょうど日本の氏神崇拜と祖先崇拜と同じもので、多神教の世界でした。

ですから、私はイスラームの人たちに向かって話をするとき、「実は日本はまだジャーヒリヤですよ」と言うことがあります。むしろ、仏教が入り込んでいますが、十分に祖先崇拜と氏神崇拜は日本では生きているからです。あっちにもこっちにも神がいる多神教は、すべての神を拜んで回ることではありません。自分の神だけを拜むけど、自分が拜んでいる神以外に神がいても構わないということです。それが多神教です。

その考え方から、日本人は一神教と言われても「キリスト教は一神教、イスラームも一神教、どちらもが一神教でいいでしょう」と単純に理解するわけですが、一神教で神が唯一だということは、その他の神々は全部神ではない、抹殺しなければいけない。そこが違います。一神教の基本は、アッラーというイ

スラームの唯一なる神を認めたら、キリスト教の父なる神も、ユダヤ教のヤハウェもどちらも神ではないと否定するか、あるいは名前は違っても実は同じ神だと認めるか、どちらかなのです。ですから、一神教ではご先祖様を拝んではいけない。キリスト教では死者を追悼するのは構わないけれども、拝んではいけない、神社への参拝もいけないと厳しく教えます。ところが日本人は祖先を拝みますから、「拝むな」と言う一神教は堅苦しくてかなわない。それが、さっき私が言った一神教嫌いです。

当然、ジャーヒリーヤのアラブ人たちも、日本人と同じで一神教に抵抗があったはずです。それまでご先祖様が大事で、部族の守護神が大事、そういう社会で生きていて、何の不都合もなかった。そこに、一人の預言者が現れて、「お前たちの生き方は間違っている。唯一なる神を信じよ」と言い始めたのです。これは、まさにいろいろな新宗教が始まるときと全く同じです。

イスラームだけではなく、仏教やキリスト教も、始まったときには世界宗教というブランドはなく、当時

の人々には怪しげな新宗教だったのです。最初は仏陀やイエスが本物か否かは一目瞭然ではなかった。彼らの教えは当時の常識から外れ、既存の宗教を否定したため、容易に信じていくことができなくても不思議ではない。当時のメッカの人たちが「ムハンマドについて行くな」、インドでも「仏陀に従うな」という意見があっても当然なのです。しかし、初期の信者たち、弟子たちはそこへ飛び込んで行ったのです。

一般に、世界宗教が興るときは創唱者、教祖に当たる人のある種の力、宗教的な力が働き、そこへ人が引き付けられるのです。難しい言葉で言うところ「カリスマ」で、啓示を与える神や悟りの真理に由来する神聖な権威と魅力を意味します。創唱者はカリスマ的人格で、その力によって、ジャーヒリーヤに不満もなかった人が新しい一神教に改宗していく。どの宗教の場合でも、新しい宗教が興るとは、人々が古い宗教から新しい宗教に改宗しなければ不可能なわけで、その場面に働く力というかエネルギーはすごいものです。

イスラームは六百年頃にムハンマドが啓示体験を

して預言者となって始まりますが、その後、百年ぐらの間に西はイベリヤ半島、スペインまで、東は中央アジアに至る広大な地域に広まりました。この拡大は、アラブ商人たちの宗教だったこともあり、地中海貿易沿いやシルクロード沿いの交易路沿いに広がりました。

イスラーム世界には様々な帝国が興亡を繰り返しました。中東では、ウマイヤ朝、アッバース朝、トルコのオスマン帝国、イランのサファヴィー朝などが有名でしょう。インドにも一時期、ムガル帝国というイスラーム国家が成立しました。現在のパキスタンとバングラデシュがイスラームの国である理由は、ムガル帝国時代に、かなりのインド人がイスラームに改宗したからです。そして、英国からの独立の際に、同じインド人でありながら、ムスリムとヒンドゥー教徒に分かれて別の国家として独立したからです。

現在のイスラームの中心はむろん中東ですが、アフリカのかんりの地域にもイスラームが入っています。中央アジアは、ソ連以前はムスリムが多く住んでいたけど、ソ連時代は宗教が禁止されていた。ところが、

ソ連が崩壊してロシアに戻った段階で、元のイスラーム信仰にどンドン戻り始めている。これは、ロシアのど真ん中ではロシア正教が盛り返しているのと同じです。その意味では、宗教というのはすごいものだと思います。日本に近い地域ではマレーシア、インドネシアがイスラームです。これは五、六年前でしたか、日本の食品会社が製造過程で豚の酵素を使ったとして大騒動になったことがありました。中国にもかなり古くから、中東との貿易関係のためシルクロード沿いの中央アジアにもムスリムがいるし、海のシルクロード沿いに入ってきた福建省の辺りにもムスリムがいます。

それからもう一つ、御存じの方がいらっしゃるかもしれませんが、モハマド・アリ、旧名はカシアス・クレイというヘビー級のボクサーが有名ですが、アメリカにブラック・ムスリムが相当数います。ヨーロッパでは、フランスで去年の暮れに暴動が起きたばかりだから覚えている方も多いでしょうが、移民たちにムスリムが多いですね。フランスではアフリカの旧植民地からの移民、ドイツの場合はトルコからの移民が多く、

移民の人口が増えて、何かと問題になりがちです。

日本には少ないので、気づきにくいですが、今お話したように、ムスリムは世界各地にいて、世界人口の五分の一、五人に一人はイスラーム教徒です。ですから、仏教とイスラームが対話することは非常に大きなことです。もっと積極的に知らなければいけない宗教の一つです。

キリスト教は十字軍でイスラームに負けたこともあり、決していい印象を持っていなかった。そのため、ヨーロッパにはイスラームへの偏見がずっと残りました。例えば、ヘーゲルやウエーバーはすごい学者です。偉大な学者がなぜイスラームに関しては歪んだ見方しかできないのか。それは不思議なぐらいです。それだけヨーロッパの偏見が根深いと言うべきでしょう。いまのアメリカもその偏見を引きずっているようですが、近代の問題は、最後に少し触れることにします。

三 預言者ムハンマドとコーラン

ここから、イスラームの基本教義に入ります。イス

ラームはアラビア語で帰依を意味します。「南無妙法蓮華經」「南無阿彌陀仏」の「南無」と同じ意味です。イスラーム教徒はムスリム（女性信者はムスリマ）といい、「神に帰依する者」という意味です。

イスラームの神はアッラーで、アラビア語でザ・ゴッドの意味です。預言者の名前はムハンマドです。昔は、欧米での表記に従って、マホメットと呼びましたが、最近ではアラビア語の表記に忠実になって教科書などでもムハンマドと記されます。生年ははっきりはわかりませんが、西暦で言うところと五百七十年頃です。没年は六百三十二年で、これは確実です。メッカで生まれ、預言者になるのは実は四十歳のところで、預言者になるまでは隊商の商人をしていたのです。

「コーラン」は、正確には「アル・クルアーン」といいます。アルはアラビア語の定冠詞で、読誦すべきものという意味です。声に出して読むと、コーランの韻律が美しく響きます。街角や放送でコーランの朗読が流れたりする。ちなみに、イスラームでは厳しく偶像を禁止していて、モスクの祭壇に神の像も画像も何

もない。ただ、メッカの方向を示す印があるだけで、非常にシンプルな空間です。神の画像、彫像、彫刻、絵など、神の視覚的表現の一切を禁じています。仏教でも名もなく、姿もない仏だと言いながら、仏像ができて普及した。キリスト教でも偶像禁止が原則ですが、イエスの像が作られ、偶像破壊の動きとが何度か繰り返されました。本来目に見えない神や仏も、普通の人間にとつては目で見てその存在を実感できることが大事なのです。教義的には神仏の形象は正しくないと言えますが、心の中で神や仏を念じるより、神仏の像に向かつて祈りたい、そういう感覚に訴えることの大事さはあるはずです。イスラームはそれを拒否しますが、画像の代わりに耳で聞くのです。コーランの言葉が耳に聞こえる。神が神の言葉を語るようにコーランが響くのです。神がこの世に顕現する姿を像で表わす代わりに、啓示の言葉を繰り返し朗読して伝える。つまり、イスラームでは視覚には頼らず、聴覚に頼って、感覚的に神を思い出させるのです。

コーランがイスラームの根本聖典で、神がアラビア

語で語った言葉をそのまま書き留めた書物です。ムハンマドは神のアラビア語の言葉を受けて、それをそのまま「神はこう言った」と人々に伝えたのです。確かに、聞いた人はムハンマドの口から聞いています。けれども、ムハンマドの言葉ではない。コーランの著者はイスラーム教徒にとつては神自身です。ここに、キリスト教との非常に大きな違いがあります。

ただし、ムハンマドは預言者になつても生き神になつたわけではありません。生き神なら彼の言葉はすべて神の言葉になりますが、ムハンマドが家族や信者の仲間たちと話した言葉はムハンマドの言葉です。逆に言うとうと、ムハンマドが啓示を伝えるときは、恐らく「この部分は啓示だ」と言つて人々に伝えたと思われます。神の言葉とムハンマドの言葉とは厳密に区別されていました。ムハンマドが亡くなった後に、ムハンマドの言行録はコーランとは別にハディースとして記録されました。したがって、ムスリムにとつてコーランはアッラーがアラビア語で直々に語った言葉で、非常に神聖で尊いのです。

そうだからこそ、コーランを侮辱したり、コーランのページが破られたときにムスリムが激怒するのです。これは日本人の感覚ではわかりにくい。キリスト教徒にも実はわからない。キリスト教徒にとっては、新約聖書以上にイエス・キリストが大事なのです。イエス・キリストは「神のロゴスの受肉」で、神の言葉がイエスという肉体、人格になったと信じられています。イエス・キリストに匹敵するのが、イスラームではムハンマドではなくコーランです。神の言葉（ロゴス）は恐らく何語でもない言語だとすると、それがアラビア語になったものがコーランです。つまり、キリスト教にとつてのイエス・キリストと、イスラームにとつてのコーランが同等の神聖さをもつと考えればいい。ここが一つのポイントです。後でまた触れますが、ムハンマドはイエス・キリストのような救世主の役割を与えられず、果たすこともできないのです。

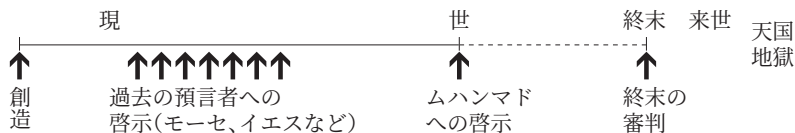
四 コーランの世界観と内容

次に、コーランの内容に移ります。コーランは百十

四章からなっていますが、各章に章題はついていますが、題目のテーマが説明されているわけではなく、いろいろなことが書いてあります。逆に言えば、「創造」について多くの章で少しずつ言及されています。そのようにまとまりなく叙述されているコーランの内容を、あえて世界観を説明する図式にまとめたものが図1で、創造で現世が始まり、終末でこの世が終わる。この世が終わって、終末と来世が到来します。

コーランにはいろいろな仕方では世界を創造したと書いてあります。基本的に旧約聖書と同じ無からの創造（二章一二節、七章五四節等）もあれば、混沌とした状態を天と地に分け、さらに海や山に区分けをするという仕方での創造もあります。いず

図1



れにしても、神が人間と世界の一切、大地と天とを創って、季節の巡りを含め自然界の秩序の一切を創り、維持している（三五章一三節等）。そして、我々は生きている限り、既に神の恩恵を受けていることをコーランは教えています。我々の食物は、肉食の場合でもその動物が草食であれば、最終的には神の大地で育まれたものを食べている。食べて生きている限り、「お前たちは既に神の恩恵を受けている」と教えるわけです。

次に、過去の預言者たちへの啓示に関する物語があります。先ほど、一神教は自分たちの神が唯一で、他の神を認めないと言いました。すると、先行するユダヤ教とキリスト教の唯一神をどう扱うかが問題となる。むろん、すべてを否定するのが一つの考え方です。もう一つは、先行する唯一神を抱き込むことです。まさにキリスト教はユダヤ教の聖書を旧約聖書、つまり古い契約として抱き込み、イエスの教えは新しい契約なので新約聖書です。ついですが、ユダヤ人たちは自分たちの聖書を旧約聖書とは言いません。日本ではキリスト教の影響で旧約聖書と言いますが、ユダヤ人に

そう言うて怒られます。「ヘブライ語の聖書」「ユダヤ教の聖書」と言ってほしいとのことで、当然だと思えます。

では、イスラームはどうなのかと言うと、ユダヤ教もキリスト教も同じアッラーが預言者を遣わして基本的に同じ啓示を与えたとコーランに書かれています（五章六八・八二節等）。むろん、ユダヤ教徒とキリスト教徒はこの説を絶対に認めようとしません。しかし、イスラームではそう主張します。具体的な教えの相違については、ユダヤ教徒やキリスト教徒が勝手に啓示を捨てたり歪めたから違いが生じたとコーランでは記されています。

イスラームは神に子供があるわけがないと言って、イエスが神の子であることを認めません（二章一一六節）。これはユダヤ教徒も同様に認めません。しかし、イスラームではイエスを預言者の一人としては認めます。神が啓示を与えるとき、天から言葉が響くことはない。神が言葉を預ける人、預言者を選んで、人間の肉声で神の言葉を伝えさせるわけです。それが一神教の啓示

の伝統です。イエスもその預言者としては尊敬しますが、神の子として崇拜の対象にすることは間違いだといスラームでは言うわけです。ところが、キリスト教にとつてはイエス・キリストが神の受肉であり、神の子であることが一番大事な教義ですから、いスラームの解釈は絶対に許せないことは明らかです。

過去の預言者たちへの物語が意味するところは、過去にもアッラーは同じ啓示を与えたが、それを信じなかった人も多く、信じた者たちが迫害にあったこともあることを教えて、迫害にあつてはムハンマドと彼に従う信者たちを慰め、励ますものだった。時間が過ぎて、今いよいよムハンマドに啓示が届いて、同じような事態が繰り返されているというわけです（七章一〇一節以下等）。

コーランには、ムハンマドへの啓示があつた後の世界がどのようなかについて、何の言及もありません。ノストラダムスの大予言のようなものもの見事に何もありません。この世の未来の歴史には全く触れない。コーランの描写は、映画で言えばパッと画面

が切り変わる。ムハンマドの時代から画面が一変して、いつかわからないが、必ず到来する終末の場面になる。終末とは宇宙的な破壊であり、天使がラッパを鳴らすと宇宙の破壊が起こり始めます。星が落ちる、大地が割れたり、軟弱になる、山が綿毛のように飛び散り、海は沸騰するなど、一切の自然秩序が壊れる様子が生々しく描かれています（八一・八二章等）。

そのときに、神による裁き、最後の審判が行われます。キリスト教と同じです。終末に立ち会った人々はその場で裁きの場に引き出されますが、昔に死んだ者は裁きを受けずにすむのかというと、そうではない。終末になった途端、死者が甦るのです。死者は身体ごと甦って、神の前へ連れて行かれ、「お前は神を信じたか、預言者を信じたか」と訊問されて、信じた者は天国へ、信じなかった者は地獄へ落ちることになります（六九章一八節以下等）。

コーランの描写は、神が語ったにもかかわらず、人間を非常に鋭く観察しており、また人間くさいものです。最後の裁きの場面での人々の態度や感情、天国や

地獄に至った人々の有様の描写はすべて非常にリアルです。もしコーランを映画にしたら、非常に面白い映画になると私は思います。例えば、話に聞いていた終末がいよいよ始まった。終末などバカにして、ないと思っていたのに、いよいよ始まったとき、慌てふためく人の姿が描かれています（三七章一四三三節等）。

というのは、ジャーヒリーヤの世界観には終末という考え方はなかったのです。いまの日本人が終末を信じていないのは、合理主義のためでもあります。神道にも終末はなく、終末に死者が甦るという考え方もありません。ある意味では、ジャーヒリーヤの方が合理的だったとも言えます。ジャーヒリーヤのアラブ人がイスラームを容易に信じた第一の理由は、死者の甦りを信じたからです（三四章三八節等）。人々はムハンマドに「死者が甦るって一体どういうことなのだ」と毒づいた。ムハンマドは「私にはわからないけれど、神が約束されているのだから必ず起こる」としか答えなかった。

信じない人間にとって地獄は怖くないし、天国もあ

りがたくないのです。ところが、来世を信じたら、地獄は怖く、天国はありがたいわけです。不信仰者は終末も来世もあるものかと高をくくっている。コーランは、不信仰者たちが裁きの場面に遭ってどういう表情をして、慌てふためくかを描写しています。神の前に引つ張って行かれて、細大漏らさず記録されている閻魔帳を広げられて、「お前の一生はこうだ」と示され、ぐうの音も出ない。それこそ遠山の金さんの前の悪人のように「参りました」と言うしかないわけです。

裁きの場面にも面白い話があります。人間は非常にずるく、終末の裁きの場でさえまだ言い逃れをしようとする。閻魔帳の記録にあるから「お前は殴っただろう」と問われると、口先では「殴っていない」と言うとするのです。ところが神は、終末の裁きでは手足や皮膚にも言葉を与える。すると、手足や皮膚が証言を始め、「いや、殴りました、蹴りました」と証言する（四一章二〇・二二節）。この描写は非常に面白いと私は思います。人間は、意識こそが自己だと思っているけれど、身体も自己に他ならないことを示しているからで

す。ピアノやテニスを習う場合も、頭で考えながら指や体を動かす間はまだ未熟で、上達すれば考えることなく身体が反応します。そうして身体的に身についた動きは忘れたと思っていても指が動くことがあります。そうした自分も自己であって、身体の訓練が人間形成において意外と大事なのではないか。このことを忘れてきたのが近代のような気がします。頭でつかちになり、それで偉そうな顔をしてきたような気がします。こういう人間観に気づく点でも、コーランは非常に面白いものです。

天国と地獄の描写も同様に面白い。天国へ行った人間が、「よくわからなかったけれど、信じていてよかった、いいところへ来た」と喜んでいきます。地獄では、火に焼かれてヒューヒュー言いながら、「お前が信じるなど言うから、信じなかったのに、情けないことになった。お前のせいだ」と、不信仰を他人のせいに行っている様子が描かれています（三四章三一三四節等）。このような天国と地獄はあまりにも人間くさくて、霊的で宗教的な世界という印象を与えません。私も最初は奇妙に感

じましたが、やがてこれはコーランの優れた特徴だと気づきました。天国に行った人間も、深く信仰を自覚した人ではなく、いい加減な人物です。信仰は優れた人間だけの問題ではない。ごく身近にいる普通の人間が天国か地獄に行くのであり、信仰はそういう人間の問題だということを、コーランの描写は教えている。ずるかったり、いい加減な人間も行く末は天国か地獄のどちらかだということを、非常に上手く教えていて、説得力があります。一度コーランを読んでみて下さい。このように理解すると、コーランの人間描写はなかなか面白いです。

このようなコーランの叙述は、信仰への誘いという意味をもっています。既に神に創造されて大地の食べ物を食べているのだから神を信じなさい。この理屈が分ければ、神に帰依することは、人間として当たり前なことだと教えるわけです。もう一方では、いつか未来に終末が来るから、そのときに天国に行くには今、信仰に入りなさい、そうでないと地獄に堕ちますよと言うわけです。天国に行くための教えとしては福音で

あり、地獄に堕ちないという教えは警告です。信仰への扉はいつでも開かれています。が、終末が来てしまってから、「ウワッ、本当だった。信じます」と改宗しようとする者もいるけど、この信仰は認めないとコーランに記されています。

コーランは基本的に、なぜ信じなければいけないのか、神とは何か、人間とは何か、どのように終末が来て、来世はどんな場所かを語っています。もう一度映画にたとえるなら、ジャーヒリーヤの人たちは見たいと言っていないのに、無理やりコーランという映画を見せられて、映画は「真理はこうなのだ。だから、信じなさい」と言っている。しかし、頑なにジャーヒリーヤを正しいと思い込んでいる人は「ただの映画で、映画の中の終末も来世も作り話で、ジャーヒリーヤの世界こそが現実だ」と言って、不信仰に留まります。ところが、一部の改宗した人は、同じように映画を見せられて、最初はやはり映画だと思っただけで、「ちょっと待てよ、映画が示す出来事が本当かもしれない。自分が今まで確かだと思っているジャーヒリーヤの世界

ではなく、神が語って見せてくれた終末や来世の方が真理かもしれない」と気づくのです。その人々が改宗者になります。人を改宗させる力は、啓示の言葉が持つ独特の権威と説得力だろうと思います。

仏教やキリスト教では、神と人間の間にある種の仲介者というか、聖職者がいますが、イスラームでは人間と神との間にあるのは神の言葉だけ、言葉があるだけです。各個人が神の啓示を聴いて「信じます」と応答し、コーランの教えに従って、最後の審判と来世を信じて生きることです。ただ信じるだけではなく、コーランには、一日数回の礼拝や断食、喜捨など、信仰者の生き方がいろいろ記されています。信仰者一人ひとりがコーランという神の言葉に従って生き続けること、それがイスラームの信仰です。イスラームは身体を卑しめないと言いましたが、イスラームは内面の信仰だけではなく、身体的行為を非常に重視する宗教です。イスラームは全員在家の宗教です。神学者や法学者はいますが、彼らは学者であって、懺悔を聞くとか罪を赦すなどの特別な救済の権限を持っているわけ

はない。そこがキリスト教の聖職者とは違います。ですから、救済に至る道、方法は同じで、神を信じて戒律に従うだけです。カリフなど政治の支配者や学者も、貧しい者も無学の者も、同じように礼拝し、断食する戒律が課せられています。

コーランによれば、預言者には人々を救済する能力、誰かを信仰者にする力はないのですが、信仰者となった人々からは尊敬された。しかし、その死後にムハンマドを神格化することは徹底してなかった。預言者は人間だというコーランの教えが浸透していたというべきかもしれません。ムハンマドという預言者は救世主ではないけど、イスラームの創唱者（教祖、開祖）であって、イスラームの共同体（ウンマ）をつくった人です。政治的・軍事的指導者でもあった。日本人は、宗教者が政治と軍事の指導者でもあると聞くだけで、嫌悪感を抱き、拒絶反応を示すでしょう。しかし、ムハンマドの権威が政治や軍事に絡んでいることは、イスラームという宗教にとっては必然性があるのです。この点はウンマの説明の中で話します。

イスラームの人間観は非常に面白いものです。神が人間を精神と身体の統合として、男か女としてつくったわけですから、身体を卑しまない。性的な欲望があること、お腹が空いて物を食べることは必然的です。

イスラームは厳しい宗教だと思われていますが、結婚生活や経済活動を卑しまず、身体的欲望を認め、欲望に寛大な宗教です。キリスト教は「人はパンのみにて生きるにあらず」を強調しますが、現世にいる限り、人は精神だけで生きることができない。人はどこかで家庭生活をして、稼いでパンを得て生きなければならぬ。糧を得るための経済活動は必要で、卑しむものではない。言われてみれば、当たり前の話です。当たり前なのに、私たちは宗教を精神の問題に限定してしまっているのではないのでしょうか。近代以後に、特にそうなったように思います。イスラームでは、そうした家庭生活や経済活動も信仰者の生き方の一部であり、宗教の問題だと考えます。それが、イスラームでは結婚や商取引など社会規範も宗教的戒律に含まれる理由なのですが、その点についてはもう少し後で話します。

ここで、イスラームの罪惡觀に少し触れておきます。イスラームではキリスト教言う原罪を認めません。かなり以前に、日本人から「イスラームは罪惡に関しては樂觀的なのですね」と言われて、うまく答えられませんでした。今では次のように考えています。原罪は罪の自覚、あるいは具体的な罪惡を犯す根拠であって、原罪という具体的な罪があるのではない。仏教の宿業も現在の不幸や罪惡の原因である点で、原罪に似ているかもしれません。西田幾多郎は宗教的な惡と倫理的な罪惡は違ふと述べています。確かに原罪や宗教的惡は倫理的な意味での善人にも及んでいるのですが、やはり惡や有限性を自覚するのは実際に具体的な惡行を犯すときだと私は考えています。イスラームは、具体的な惡のところで捉えるわけで、原罪とは言わない。イスラームが原罪を認めないのは、ユダヤ教と同じです。しかし、コーランには、結婚や離婚、相続などのかかなり詳細な規範が書いてあります。読誦されるコーランの中に、相続は誰に何分の一とまで記され、誰とは結婚するな、離婚するときはどうするかなどが書

いてある。聖典の中に、金錢と性に関する下世話な問題が書いてあるのですから、日本人の感覚ではやはりびっくりします。なぜそのような詳細な規範が定められているのか、聖典に記されているのか、その理由は、人間がそのような場合に過ちを犯すからです。人間が惡を犯すことを知っていればこそ神が規範を与えている。キリスト教では、律法は形式主義で、むしろ罪を明らかにすると教えますが、コーランはそう考えない。もう一度原罪との比較になりますが、原罪は惡の始まりです。神話上の過去におけるアダムとイブの墮罪から、人間の罪は始まった。すべての人間はいわば過去の方向から罪責を負っている。だからイエスが十字架で死んで人類の罪を贖^{あがな}った。イエスを信じ、原罪の赦しを請うことがキリスト教の信仰です。ところが、イスラームは罪惡の始原にはまったく触れません。アダムとイブの墮罪の物語はコーランにもあるのですが、アダムは罪を悔いて、神は赦した。赦したが、やはり樂園を追放して地上に追いやられた。地上の人間はジャーヒリーヤの人々のように、神を忘れて暮らしてい

る。そこに、神はいずれ預言者を遣わして啓示、真理を伝える。そのとき信仰すれば来世での天国が約束されるが、不信仰者は地獄に行く。啓示を受ける以前のジャーヒリーヤの人々は神を忘れ、罪惡を犯している

が、信仰すれば以前の罪惡は赦される。ところが、人間が犯す罪惡の結末をイスラームは重視する。「いずれ終末の裁きがある。いまあなたが行うことを人間はその場限りで忘れるが、神は忘れない」と。終末の裁きを信じたとき、初めて今ここの行為が重くなる。終末を信じないなら、「まあ、いいか」で済ますことができる。我々はほとんどそのようにいい加減に生きています。「良心は少しチクツと痛むが、誰も見ていないし、まあいいや」と些細な惡事、意地惡をしてしまう。ところが、神と終末を信じた者には、その些細な惡事もすべて記録され、終末の裁きでカウントされると考えらる。すると怖くなるのです。イスラームは礼拝などの宗教的修行だけではなく、ごく普通の日常の暮らしを正しく生きingことを要求する宗教です。要するに、欲望にかられて罪惡を犯しそうな場合の歯止めは、やが

て必ず来る終末です。今ここので行う罪惡の結果を想像して止めさせる、将来の方向から歯止めをかけるのがイスラームです。

五 ウンマとシャリーア

次に、イスラーム共同体、ウンマについて説明しましょう。これは信仰の共同体ですが、同時にムスリムの生活共同体でもある。要するに、教会や教団と国家との区別がない宗教共同体です。私たちは政教分離が当たり前だと思っているので、教会制度、わかりやすく言えば本山やパチカンがどこにもない、一度もつくられたことはないイスラームが理解しにくいのです。欧米でもイスラームを理解しがたい宗教だと思っている原因の一つはこの点です。メッカにカアバ神殿はあるが、そこにも他の場所にも法王はいない。その状態で今日まで存続してきたのがイスラームです。

ウンマ・ムスリマという表現がコーランにあり(二章一二八節、それは人々が暮らす共同体が神の意に適ったものであることを意味します。先ほど言ったように、

イスラームでも信仰は精神と心の問題ですが、信仰者は男か女か、若いかな寄りか身体を持っている。信仰者が生きる共同体は、キリスト教の教会のように信仰を絆とする共同体で、社会生活は国家に委ねることも可能です。わかりやすい例では、明治以降の日本のキリスト教徒かもしれません。キリスト教に入るとき精神的な改宗であり、生活様式の大きな変更は求められない。日本人キリスト教徒は家督制度や長男相続など日本の家制度に従って生活せざるをえません。キリスト教では祖先崇拜を禁止しても、日本の家族制度と結婚に従うと祖先崇拜が絡んできます。最近でも、京都のキリスト教神学の先生が地域の地藏盆に参加すると聞いて、私はびっくりしましたが、なるほどとも思いました。つまり、心の信仰と社会生活が別の原理に従っていることは生き難いのです。

イスラームは、その困難、矛盾を最初から見抜いていたとも思われます。初期のムスリムたちは各自が属していたジャーヒリーヤの部族の結婚規則などに従うことも可能だったはずですが、イスラームに改宗した

らそれも捨てて、イスラーム的な結婚の規則に従わなければならない。信仰者が身体的存在である以上、結婚も相続問題も起こる。それが当たり前です。精神的なものと、具体的な生活の規範が別ルールではなくて一本で通るべきだと考えたときに、イスラームという宗教が人間の社会生活や金銭の問題から、いろいろな問題、犯罪の問題にまで口出しする。一人の人間が生きたとは、精神的な次元だけでなく、道徳も法的な問題もすべて必要だという考えは、けっして間違ひではなく、むしろ当たり前です。

そういう意味では、非常に筋の通った宗教です。イスラームに改宗した人にとって居心地がよかったのだろうと思います。これは私の推測にすぎませんが、イギリスがインドを三百年にわたって支配したけれど、キリスト教への改宗者は少ない。ところが、イスラームに改宗したインド人は多く、現在ではパキスタンとバングラデシュに住んでいます。ヒンドゥー教もヒンドゥー・ダルマという儀礼規範と社会規範を包摂する規範体系を持っています。ヒンドゥーはカースト社会

で、ヒンドゥー教徒がキリスト教に改宗すれば、カーストを認めないけど、カースト社会で結婚、経済活動をどのようにすればいいのか、キリスト教は何もルールを与えないので、非常に生き難かったと思う。仏教がインドで根づかなかった理由も同じではないかと思っています。仏教徒はカーストを認めず、どのカーストとも付き合うと言っても、相手のヒンドゥー教徒はそれを拒絶したに違いない。ですから、インドで仏教やキリスト教が広がるには、ジャイナ教のように、仏教やキリスト教信者を一つのカーストと認めないと生き残れない。だが、カーストを認めることは仏教やキリスト教の教義に矛盾する。それに対して、イスラームは独自の婚姻や社会規範を持っているから、イスラームに改宗したインド人はイスラームのルールで結婚などをするから、カースト社会で、ムスリムの間で社会生活ができるわけです、受け皿があったわけです。

イスラームが急速にアラビア半島全域に広がった理由も、同じだったのではないかと思います。イスラームへの改宗者が圧倒的多数になったら、残されたジャ

ーヒリーヤの人には結婚相手もなくなり、商取引もやりにくくなった。ムスリムになった方が税金が安かったのも、ユダヤ人はさすがに改宗しなかったが、アラブ人キリスト教徒の多くもイスラームに改宗したといわれています。このように改宗の動機が不純であるのはけしからんと思う方もあるでしょうが、納得できない宗教であればいざ離れたいと思われまふ。ところがイスラームの場合、一旦ムスリムになった人々はその信仰を捨てなかつた。これは、イスラームに何らかの魅力があつたからだと考えるべきだろうと思います。

ウンマは信仰者の精神面も社会生活も面倒を見る共同体で、結果として国家も含み、裁きも必要とします。裁きに対して、イエス・キリストは赦しを強調します。売春婦に石を投げようとする人に対して、イエスは誰もが悪を何がしか持っている、つまり原罪があるのだから赦しなさいと言つた。宗教にとって赦しは非常に大事で、イスラームにもやはり赦しはあります。例えば、離婚するときに結納金を取り戻すことはできるが、できれば取り戻さないことが望ましい。これも卑近な

例ですが、赦しの精神はイスラームにもある。しかし、赦しだけで社会秩序は成り立たない。交通法規がなく、互いに赦しの精神で通行するようにいたします。まずスムーズな通行は無理だが、無茶をする人を罰する規則もない。社会には欲望の強い人と我慢できる人、知力、財力、体力そして性格や道徳観の違う多様な人々がいる。その社会秩序を維持し、公正と正義を維持するには個人の良心と赦しだけでは不可能で、法と司法が必要になります。考えようによっては、それも人間の弱さかもしれません。イスラームは人間の問題を丸ごと宗教で対応しようとしています。

イスラームは信仰者の欲望を認めますが、欲望の抑制も宗教の問題とする。現代では、宗教は心の問題で、社会の問題は国家や世俗政治でと分けるのに慣れているので、イスラームのやり方に疑問が生じます。ただ、人間の社会的存在までを考えると、イスラーム的思想や発想は筋が通っています。ただ、理論的には神が定めた法であるため、イスラーム的社会規範が時代に合わなくなったとき、改変しにくいという問題が

あるのは事実です。

シャリーアはイスラームにとって非常に大事で、イスラームを理解するにはシャリーアを正しく理解することが必要です。シャリーアはかなり複雑な規範体系ですが、できるだけ簡単に要点のみを説明します。シャリーアは「イスラーム法」と訳されますが、原義は水場に至る道を意味する一般名詞で、シャリーアは命に至る道という意味です。ちなみに、仏教では仏道（マ）があり、イエスは「私は道である」と言ったように、宗教と道は関連していて面白い。道は歩むべき場であり、どこか実践と繋がっている。ただし、仏教とキリスト教の場合、精神的な道で、必ずしも詳細な行為規範を意味しません。イスラームでもシャリーアは「帰依の道」という意味を持っています。イスラームの場合、帰依の精神で生きるとはどういうことかと問い、具体的な行為規範に分節します。それが律法体系、様々な戒律からなる規範体系としてのシャリーアです。日本人には精神が大事で、精神が整えば、個人がその都度何をすべきかを考えて行為する、と思っている。

帰依の精神があれば礼拝をするので、一日五度の礼拝を義務づける必要はない、強制は嫌だと考えるのが日本人です。ところが、イスラームは帰依の精神で生きるとはこうだと、具体的規範を定めました。日本人からすると煩瑣ですが、イスラームのように在家の信仰者は人間関係や金銭勘定など、それこそあらゆる事柄に気を遣わねばならない。そうしないと生きられない。しかし在家の生活をしながら、四六時中神に向かい、精神を神に集中することは不可能です。イスラームはそれを見抜いているから、一日五回だけ生活の手を止め、商売を中断して、神に向かいなさい、礼拝を終えたら、また商売などに戻っていい、と教えます。

日本では、「凡夫には難しい修行はできない、だから阿弥陀仏を信じなさい」と説く親鸞がよく知られています。日本人によくわかる感覚だろうと思います。ところが、イスラームは人間の心や精神はあまり強いなまいと考えます。在家の凡夫には神を念じ続けることは難しく、自発的に礼拝するとは考えにくい。逆に、信仰心を涵養するためには礼拝や断食のような修行が決

められている方がいい。一日何回、朝と晩など習慣づけて神と向き合うこと。形から入ることが大事だとイスラームは見抜いています。

コーランには、神が人間を創造したのだから、人間がどの程度の出来栄かは神が一番よくわかっている、神は人間に不可能なことを押し付けてないと書かれています。日本人から考えると、断食など誰にもできないと思いますが、断食も確かに苦しいことは苦しいだろうが、人間にできる範囲なのだと書いてあります。ユダヤ教に比べるとかなり簡素化されているともコーランには書いてあります。

六 五つの義務（五行）

イスラームには五行と呼ばれる五つの基本的儀礼行為があり、それらはうまく日常生活に組み込まれています。まず、一日五回の礼拝（サラート）と毎年ラマダン月の一ヶ月間の断食（サウム）。この断食は、太陽が昇る前に朝食をとり、太陽が沈むまでの日中に断食をするのですが、厳格な人は水も飲みません。ただし、

断食は健康な成人の義務で、子供や病人、妊娠中、授乳中は断食の必要はありません。日没を合図にイフタールと言って家族や友人と食事を楽します。イフタールの合図に太鼓を鳴らす地域もあり、私が滞在していたトルコではモスクのミナレット（塔）に蛍光灯が灯ります。

そして、一生に一度のメッカ巡礼（ハッジ）。ハッジはイスラーム暦で巡礼月にメッカ巡礼をすることで、それ以外の時期にメッカ巡礼をするのは、小巡礼（ウムラ）でハッジにはなりません。ハッジを終えた人は名前の前にハッジを付けて呼び、非常に尊敬されます。ハッジは行きたい人が勝手に行くのではなく、国別の割当人数があり、各都市などで巡礼者を選び、巡礼前に作法の教育などをして、指導者が付き添って参加します。

ザカートは喜捨、寄付ですが、定めの喜捨である程度収入によって喜捨の額が定まっています。イスラームの社会では今でも生きています。トルコの学生の親は農家で、毎年羊一頭を喜捨していると言っていました。

喜捨の一つにワクフがあり、これは死後の財産遺贈です。時には相当広大な果樹園などをワクフに指定すると、その所有権は神に属するものとなり、誰も手を出せない。定められた管理者が運用して、運用益で学校や図書館、孤児院やモスクなどを維持管理しています。ワクフによってイスラーム世界の社会資本はかなり充実したそうです。イスラームはこうした社会互助制度に手厚い宗教だといつくづく感じます。

最後に、信仰告白（シャハーダ）で、「アッラー以外に神なし、そしてムハンマドは神の使徒」とアラビア語で唱えることです。毎日の礼拝の際にも行われます。特にイスラームに入信するには、モスクで指導者（イマーム）の前でこの信仰告白をアラビア語で唱えればいいのです。これらの五行は日常生活に非常にうまく組み込まれており、詳細な方法や、行わなかったときの対処方法などがシャリーアに定められています。

シャリーアは以上の儀礼規範以外にも、様々な社会規範を含んでいます。今日の六法全書の全部をシャリーアがカバーしているわけではありませんが、一部に

は主として家族法、商法など法的規範があります。それ

れ以外に道徳的規範、行儀作法、豚肉禁止の食物規範

なども含まれています。シャリーアは、理論上はムス

リムの行為の一切に関わっており、儀礼行為も社会行

為もすべての行為を五つのカテゴリーに分類します。

五つとは、義務行為（不履行だと罰せられる）、推奨行為

（履行が望ましいが、不履行でも罰せられない）、忌避行為

（不履行が望ましいが、犯しても罰せられない）、禁止行為

（犯せば罰せられる）そして、最後が「行っても行わなく

ても構わない行為」です。最後のカテゴリーは通常の

う一つの規範体系で定めています。

シャリーアはコーランに基づいていますが、コーラ

ンにある規範だけでは到底社会秩序の維持には不足し

ていた。預言者の在世中は預言者に尋ねることができ、

預言者の指示に従った。実際にはジャーヒリーヤ時代

の慣習をそのまま認めた場合も多い。預言者の指示や

命令は、彼の死後にも範例（スンナ）として重視されま

したから、シャリーアの中にジャーヒリーヤ時代の慣

習も取り入れられました。教義の上では絶対に相容れ

ないのに、イスラームがジャーヒリーヤ時代の慣習を

受容した。それは、歴史の中で宗教が定着するには、

箱庭を一度崩して最初から新しく作り直すことはでき

ないわけです。既にある慣習や文化の一部を廃棄する

としても、すべてを捨てることはできず、その土壌つ

まり歴史の中で新しい宗教は定着していきます。キリ

スト教や仏教が各地に定着するにも同様な事情だった

はずです。

ジャーヒリーヤを踏まえてイスラームが定着し、七

世紀のアラブ社会がある程度コーランの規範にも反映

103 イスラームの基本的教え

されています。例えば、四人まで妻を認めることにも、時代の背景があります。ジャーヒリーヤ時代は何人も妻をもつことができたが、四人に制限した。もう一つは社会的な理由で、イスラームを広める過程で、ムハンマドはジャーヒリーヤの人々と戦った。戦いで死ぬのは圧倒的に男で、母子家庭が残される。その救済策で、財力のある男は母子家庭を支えるという意図があったのです。ただし、正妻と三人の妾ではなく、四人とも正妻です。男は基本的に金銭的にも精神的にもすべてで面で同等に扱うことが条件です。コーランにそう書いてあります。ですから、大概のムスリムは「一人の妻でも大変で、とても複数の妻を持ってない」と言い、実際に一夫一婦です。

七 シャリーアの体系化と政治

シャリーアが体系化されるにはムハンマドの死後、百年以上かかりました。その形成過程にもイスラームの特徴があるのですが、丁寧に説明する時間はありません。大事な特徴を簡単に説明しておきます。シャリ

アの規範はコーランが基本ですが、コーランに規範のない問題に対して、まず預言者の言行（スンナ）がコーランに次ぐ模範となった。預言者のスンナはハディースという独特な形式で記録され、第二の聖典です。ハディースは預言者のスンナを記録した本文（マトン）と、そのスンナを伝承した人々の系譜（イスナード）も記録しています。教会制度のないイスラームにとって、教会の権威による編集ではなく、ウンマの人々の証言が記録の真正さを保証するのです。ハディースはスンナ派の中にも幾つもの版があり、シーア派は独自にハディースを編纂しています。

預言者の死後には、預言者に親しかった教友たちがウンマで生じる雑多な問題解決に当たり、比較的自由に判断を下していた。自由判断の中に、ジャーヒリーヤ時代の各地の慣習が受容されたことも多かったと推測されます。しかし、いつまでも自由判断が続けると判断基準がぶれる。つまり教友たちの判断には、イスラーム精神がしっかり根づいていたため、コーランの字句に頼らなくても、一見恣意的な判断がイスラーム

精神を生かしたものだと思感があったのですが、時代が下り、生まれながらのムスリムが増えることは、イスラームが安定した成立宗教になったことを意味しますが、信仰者たちの信仰心は弛緩します。そのため、自由判断より、コーランの字句やハディースに基づく判断が重視され始めた。

それと同時に、次第に法判断は法学者に委ねられるようになりました。これも大事な特徴ですが、シャリーアという法体系は、今日の国家法のように一度に六法全書が整うように制定されたのではなく、預言者の在世中から必要に応じて規則が定められていったのです。預言者や教友たちの判断が後の時代に判例法のように使われ、次第に整えられていったのです。シャリーアは実は成文法典ではないのです。法源はコーランとスンナですが、そこから具体的な規範を導出する方法論に相違があると、異なる法体系が成立します。実際に、今日でもスンナ派には四つの正統法学派があります。法体系の相違は法学派の相違です。

もう一つ大事な特徴として、預言者の後継者はカリ

フですが、カリフは決して全権を掌握した統治者でも、宗教的権威でもなかったから、シャリーアはカリフの命令によって整備されたのではなく、各地の法学者たちが議論しつつ整えられたのですが、この議論から規範として成立するために、合意（イジュマー）が重視されました。まず、地方ごとの法学者の間で合意が成立すると、それが法規範となり、地方ごとに異なる法体系が成立し、これを地方法学派と呼ぶことがあります。例えば、チグリス・ユーフラテス河が流れているイラク地方と水源のないメッカやメディナでは水利権のあり方が全く違うからです。

アッバース朝時代になって、法体系が地方ごとに異なるのは不都合だということで、統一が試みられました。統一されたのは、四つの法源の順位で、コーラン、ハディースに記録されたスンナ、イジュマー、最後がキヤース（類推）と言い、コーランやスンナの文言から論理的推論によって法を導出する方法です。まず、コーランを探し、次にスンナを検討して、そこに見つからないと、イジュマーで成立した規範を探し、どこに

も見当たらない場合には法学者が理性的解釈によって新しい規範を導出するのです。法学者の自由な裁量権が比較的小さいことが一つの特徴です。イジユマーは四つの法源の一つですが、イスラームにはイジユマーという公会議も開催されることがなく、そういう制度もありません。不思議と言えば不思議ですが、ウンマの権威だろうと思います。結局のところ、かつての地方法学派は法学派の相違ということで、相違は残り、四大法学派となりました。

最後に、イスラームにおける政治について、これも簡単に説明します。イスラームの政治は一言で言えばシャリーアによる統治です。シャリーアという法による統治で、シャリーアが適用されている範囲がウンマです。大多数がムスリムである中東は、地域全体、より厳密に言うならば現在の国家ごとがウンマの一部です。日本のようにムスリムが少数派の地域は属人区のように、ムスリム個人はウンマの一員ですから、その人にシャリーアは適用され、ウンマがその人に属しているのです。

シャリーアによる統治を実現するためには政治権力が必要です。預言者の死後、カリフが政治の実権者で、その後スルターンやイランではシャーが各国家を統治しましたが、あくまでもシャリーアに基づく統治でした。その限りで、ウンマの一部を統治できたのです。シャリーアによる統治は、政治の実権者の他に、シャリーアを運用し、裁判を行う法学者が必要です。カリフにはシャリーアを改廃したり解釈する権限はなく、カリフもシャリーアに従う。法学者はシャリーアを解釈するが、政治の実権はなく、各時代の政治体制に従う。そういう仕方では国家が成り立ち、ウンマが成立していたことになります。シャリーアは現代の法律とは異なり、儀礼規範も生活規範も含んでおり、それらすべてに政治が関与したわけではない。話し始めるときりがありませんが、シャリーアでカバーしきれない問題も多く、カリフやスルターンがシャリーアとは別に法あるいは法令を制定したこともあり、オスマン帝国のカーヌーン法が有名です。

なお、現代のイスラーム世界は幾つもの国家に分か

れて、大半の国家が西洋法を導入しています。政治経済や社会生活の面でシャリーアがどれだけの実効性をもっているかは疑問です。ただし、礼拝や断食など儀礼規範に関しては、今日でも全世界に共通で、シャリーアが実効性をもっています。

八 イスラームと近代化

最後に、ごく簡単にイスラームと近代化について話します。近代化のきっかけは、日本人が蒸気船と大砲に驚いたことと全く同じです。中東各地は次第にヨーロッパ列強の植民地支配を受けます。ムスリムたちは何とか西洋の近代的な武器と技術、教育制度などを取れ入れようとした。それが近代化の始まりです。

オスマン帝国が比較的早いのですが、西洋の諸制度を受容し始めた。しかし、日本と異なる点は、イスラームは社会と深く関わる宗教であって、西洋的な諸制度の受容と同時に、イスラーム改革も必要だと考えたのです。西洋化とイスラーム改革、この二つの路線で、二つの目標を掲げて近代化を進めようとした。

ところが、二つの目的の同時進行は難しく、結局二つの路線に分かれる。西洋の諸制度の受容、これをイスラームでは世俗主義と呼びます。つまり近代西洋の諸制度を受容すれば、政教分離にならざるを得ないからです。日本の近代化は西洋的なものをどんどん取り入れたが、神道も仏教も近代化に反対はしなかった。ところが、既に強調したように、イスラームは基本的に宗教と社会を分離できないと考えています。信仰者の社会生活の問題、国家のあり方もイスラームで統一して面倒をみてきた。政教分離を受け入れたらもはやイスラームではない。当たり前です、イスラームの基本ですから。したがって、世俗主義的近代化に対する反対が強く出てきます。これが、今日原理主義と呼ばれる路線です。イスラームでは復興主義と呼び、コーランとスンナに基づく近代化の実現を目標にしています。

原理主義者たちはコーランを解釈して現代的なイスラーム社会を建設したいと考えています。原理主義者たちも近代化して経済発展を達成したいのです。その

方法としてコーランとスンナに頼るのですが、女性差別など七世紀のアラブ社会を反映したコーランの字義に忠実な解釈に引きずられると、タリバーンがそうだったように、反近代的な解釈に陥ってしまう。原理主義の意図はイスラームの近代にあり、コーランをもっと自由に解釈することは不可能ではないのですが、コーランの文言に忠実な方が安心で、大胆な解釈ができない。

政教分離に反対するイスラーム原理主義は、欧米や日本を基準に考えると、とんでもない時代錯誤のように思えますが、イスラームの根本的な人間観は非常に筋の通った優れた考え方だと私は思います。政教分離も欧米をモデルにした場合、キリスト教的思想が世俗化した政治経済の分野にも紛れ込んでいないかどうか、検討する余地は残されているでしょう。

イスラーム世界には、かつてはヨーロッパより優位だったという自負があります。イスラームにとってキリスト教は同じ一神教で、同じ神から同じ啓示を受けた、しかもコーランの方が後で啓示された。というこ

とは、現代の言葉で言うところの最新バージョンなのです。ですから、イスラームの人たちは近代化するのに、キリスト教徒に教えてもらう必要はない。民主主義でもコーランを正しく解釈すれば実現できるはずだと考える。これも復興主義を支持する遠因です。

もう少し説明すると、原理主義者たちの反米の立場は、純粋な宗教対立ではなく、主として経済問題であり、国際政治の欧米主導体制への反感です。産油国以外の中東諸国はまだ貧しい。体制派は欧米に従い、種々の経済援助を獲得するが、なお経済的不平等は歴然としている。原理主義者は実際に、エジプトなどで貧困者のための医療活動をするなどして、彼らの支持を得ている。すべてのムスリムが、無実の市民を犠牲にするテロを正しいとは思っていないくても、テロに心情的にうつつぶん晴らしを感じたのは事実です。

私もテロを容認しませんが、経済問題やパレスティナ問題を解決せずに、テロだけを一方的に非難するだけでは、問題が解決しないと思っています。かつてイスラームが優位にあった時代、イスラームはキリスト

教やユダヤ教に対して比較的寛容だった。いつの時代でも、強者、より優位にある者が弱者に対して寛容であることが必要で、現状で言えば、欧米がイスラーム世界に対して、より寛容である必要があると考えています。

近代以前にヨーロッパと全く違う伝統を持っていた点では、日本もイスラームと同じです。日本は何も考えずに西洋化を進め、百年以上経った現在、多くの日本的な慣習や考え方が根強く残っている。ある程度成熟した伝統と文化の高さを持った地域は、どれだけ異質なものを取り入れてもそう簡単に伝統はなくならない。イスラーム世界もどんだん西洋的なものを取り入れても、イスラーム的伝統は残るだろうと思います。ところが、イスラームは近代化の入り口で、近代化はしたいが、西洋化は嫌だなどと議論をして、その分、近代化の速度が遅れたような気がします。もし日本の現代を検証するなら、イスラームの近代化や伝統を考慮に入れると、欧米との比較では見えなかった問題が見えてきます。そういう意味でも、イスラームを勉強

することは大事なのです。

(おだ よしこ／関西大学教授)

(本稿は二〇〇六年一月二十日に行われた当研究所主催の公開講演会の内容に加筆いただいたものです)